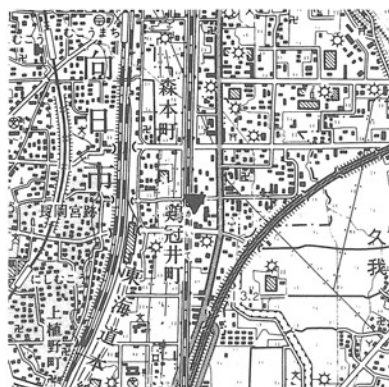


京都・長岡京跡
ながおかきょう

- 1 所在地 京都府向日市鶏冠井町馬司
- 2 調査期間 左京第四七三次調査 二〇〇二年（平14）六月～
十二月
- 3 発掘機関 財向日市埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 國下多美樹・松崎俊郎
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 長岡京期（七八四年～七九四年）
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（京都西南部）

調査地は、左京二条条間大路・東二坊大路交差点の北部を含む二条二坊十五町南東隅、二条三坊二町南西部と推定される。

検出した遺構には、二条条間大路北側溝、東二坊大路東西両側溝とその路面上の礫を伴う路盤工事跡のほか、十五町においては二時期の変遷がある掘立柱建

物・井戸・柵・溝、二町においては二時期の変遷をもつ掘立柱建物・井戸・凹地・溝がある。調査の結果、両大路の交差状況が明らかにになり、交差点に面する宅地の性格を判断できる多量の遺物（遺物整理用コンテナ二六〇箱）が得られた。

木簡は計一〇点出土した。内訳は、東二坊大路西側溝SD四七三一〇から六六六点、同東側溝SD四七三三〇から一六六六点、二条条間大路北側溝SD四七三三六から一六六六点、東二坊大路路盤から一六六六点、十五町内の溝SD四七三三一から一六六六点である。

このうち、東二坊大路路盤から出土した木簡は、二片に分割され、約三m離れた地点から出土した。西側溝は路盤工事と併行して改修されており、部分的に護岸施設も設けられる。西側溝の木簡は大量の長岡京期土器類、緑釉陶器、木製品とともに、十五町側から一括的に投棄されたと考えられる。墨書土器（「大」ほか約七〇点）や線刻土器も多数出土し、十五町が京内に設けられた現業部門の官司であつた可能性を示唆する。

一方、東側溝は一部に掘り直しがあるが、大きな改修は受けていない。東側溝の木簡は多量の土器類とともに、機能を終えた段階で二町側から投棄されたとみられる。共伴して墨書土器（「土家」「家」ほか約八〇点）が出土し、過去の調査成果も合わせて二町も官司とみられる。

東二坊大路路盤

- (1) ・「縄紀□綢鯛鰯錢釘飯餅道有大舍人右十人正正□ (第二面)
 ・「右大臣錢延曆□年七月十三日右釘廿五□ 近江国蒲生郡 (第二面)
 ・「□□行道今□蘭□有□□牧□□成□ 倉□□ (第三面)
 ・「□□ (繼力) (第四面)
 ・「□□ (繩) (480)×35×30 065
- 東二坊大路西側溝SD四七三二〇
- (2) ・若人調鹿堅魚老籠
 ・延曆□年□月 (七力) (十力) (114)×(20)×3 081
 (7) □□ 114×16×7 065
 「湊」 (32)×(6)×2.5 081
- (3) ・「▽栗田□□錢」
 ・「▽ □□」 119.5×20×6 032
 溝SD四七三三一
 (8) ・□□□□ (85)×(25)×4 081
- (4) 「▽□子」 (竹力) (85)×(12)×4 039
 二条桑間大路北側溝SD四七三三六
- (5) 「▽□□五斗」 (米力) (136)×(13)×3 031
 (9) 「▽丹□」 (生力) (97)×18×5 039
 ・「▽庄庭成五斗」

東二坊大路東側溝SD四七三三〇

(10) ・米 魚魚

・茵  (左側面)

(380) × (17) × 20 0.65

(1)は部材の四面に習書したものの。少なくとも二人以上の筆による。糸偏・魚偏・金偏の文字を二〜四文字書いたものや、典籍の一部と思われるものと、記録風の習書が書かれている。年紀は残画からみて延暦八年(七八九)または延暦一〇年で、東二坊大路の路盤改良が行なわれた時期が推定できる。延暦八年七月一二日の時点での右大臣は藤原是公であるが、同年九月に薨じた後、翌九年二月に藤原継縄が就任している。なお、第三面の「成」の次は「成」または「咸」。

(2)〜(8)は左京二条二坊十五町に関連する。すべて板目。(2)は調の荷札。年紀は残画からみて延暦七年(七八八)か。(3)は「人名+銭」の付札。「銭」の下には数量・単位などの文字が続くことが予想されるが、剝離しているため不明である。(4)は竹の子の付札。(5)は米の付札。(6)は呪術的な木簡か。
(9)(10)は左京二条三坊二町に関連する。(9)は米の荷札か。板目。(10)は部材に習書したものの。板目。
なお、釈読は京都大学の鎌田元一氏の指導のもとで佐藤直子が行い、奈良文化財研究所史料調査室・歴史研究室の方々のご教示を得た。

(國下多美樹・佐藤直子)

